農家の婦人労働に関する研究

第1報 統計からみた婦人労働の推移[※]

酒井^{※※} 学・倉田^{※※}和彦・永井^{※※}謙二

Manabu SAKAI, Kazuhiko KURATA and Kenji
NAGAI: Studies on Farm Woman's Labour.

I. Statistic Change of Woman's Labour.

1. はじめに

家族労作経営を基盤としてきたわが国の農業が、婦人労働に大きく依存してきたことはいう迄もない。この報告は、近年の農村及び農家の変質に伴う婦人労働の量的・質的な推移と現状を、全国的統計によって明らかにすることを目的とする。

2. 労働力及び就業者の男女比の

年次の推移

過去約15年間の推移を農林省及び総理府の諸統計からみると、第1表⑦及び⑧のように、全産業では労働力・就業者とも男女比はほぼ一定している。また、第一次産業就業者率の減少傾向にも男女差は認められない(表の⑦)。しかし、農業内部では、女子の比率の上昇が明らかにみられる。まず、女子は農業労働力人口に対する就農人口率が男子より高く、かつその減少率は男子より低い(表の⑨)。農業就業人口中の比率、自家農業への就業率では、いずれも女子は男子のほぼ2倍である(表の④、⑤⑥)。その結果、年間150日以上自家農業に従事する女子基幹的農従者は男子より

第1表 農業労働の女性化の推移¹⁾

年次(昭和, 年)		35	40	45	48
項 目		%	%	%	%
全 産 業					
⑦ 女子労働力人口/15才以上労働力人口		52	52	52	52 ²⁾
⑧ 女子就業者数/全就業者数		40	39	40	39 ³⁾
⑨ 性別第1次産業就業者数	男	25	18 ³⁾	15 ⁴⁾	13 ²⁾
⑩ 性別全産業就業者数	女	38	29 ³⁾	24 ⁴⁾	21 ²⁾
農 業					
⑪ 性別農業就業人口	男	56	47	43	34 ⁵⁾
⑫ 性別農業労働力人口	女	73	64	61	52 ⁵⁾
⑬ 就業種類別農家世帯員	自家農業のみ	63	66	66	68 ⁵⁾
⑭ 兼業のみ	自家農業+兼業	21	28	32	34 ⁵⁾
⑮ 非就業	兼業のみ	34	39	44	46 ⁵⁾
⑯ 農業就業人口中女子の比率		59	60	61	62
⑰ 性別自家農業のみ就業者数	男	50	38	34	27 ⁵⁾
⑱ 性別16才以上農家世帯員就業者数	女	84	72	65	58 ⁵⁾
⑲ 基幹的農従者中女子の比率		53	53	64	56
⑳ 性別基幹的農業従事者の年齢構成	16~29才	19 ⁶⁾	14	11	9 ⁵⁾
	男 30~59	57 ⁶⁾	59	60	59 ⁵⁾
	女 60~	24 ⁶⁾	27	29	32 ⁵⁾
	16~29	25 ⁶⁾	16	11	8 ⁵⁾
	女 30~59	65 ⁶⁾	72	76	77 ⁵⁾
	60~	10 ⁶⁾	12	13	15 ⁵⁾
㉑ 年間自家農業労働時間中女子の比率		51	51	52	51
㉒ 都府県規模別	<0.3ha	64	63 ³⁾	65	58
	<0.5	59	59 ³⁾	62	
	<1.0	51	54 ³⁾	55	53
	<1.5	48	50 ³⁾	51	50
	<2.0	47	50 ³⁾	50	49
	>2.0	47	49 ³⁾	49	50
㉓ 兼業種類別	恒常的勤務	—	—	35	20
㉔ 女子の比率	出かせぎ	—	—	0	0
	日 雇	—	—	34	58
	自営兼業	—	—	37	39

※昭和50年4月25日受理

※新潟大学農学部, Faculty of Agr, Niigata Univ, Igarashi, Niigata, 950-21

注 1) 各年次の総理府「労働力調査報告」「産業別人口調査」、農林省「農林省統計表」、「農家経済調査報告」、「農業調査」によって作成。

2) 46年, 3) 41年, 4) 44年, 5) 49年, 6) 36年

約3割多い(表の㊸)。以上の過程で、男女とも若年層が急減し、中高年層の比率が高まっているが、特に最近は女子の基幹農従者中30～59才層が8割近くに達していることは、男子の60才以上層が3割をこえていることともに注目に値する。すなわち、農従者の女性化は主婦化とほぼ同義なのである。(表の㊸)。人数のうえばかりでなく、実質的な農業労働時間の面でも女性化が進んでいる。第1表の期間に、1家族あたり年間農業労働時間は3057時から2205時に著減しているが、その中で女子の比率は累年漸増している。ただし、経営規模が小さいほど女子の比率が高い。また兼業の場の恒常的安定性では女子は男子より不利な状態にある(表の㊹、㊺)。なお、第2表は林業も含むが、自家営業主と家族従事者の比率は男と女とではほぼ逆転しており、家族労作的経営の中で女子がなお従属的立場におかれていることを示している。

3. 作目及び作業工程別にみた農業労働の女性化

いわゆる農業労働の女性化の進み方は経営類型によって異なる。第1表とほぼ同じ期間における基幹作目別の女子労働への依存度の推移を示す第3表によれば、女性化は養豚・養蚕・野菜作経営で著しく、稲作・果樹作がこれに次ぐ。工芸作経営では、女子労働依存度はやや低下しているものの、その比率は47年現在でなお50%をこえている。

次に、おもな農畜産物の農林省生産費調査報告によって、作業体系及び作業工程別に全労働時間中の女子労働の比率を昭和35年(一部37または46年)と47年とを対比して示すと、第1～4図の通りである。同一生産物でも、調査年次の差や栽培法の変化によって作業工程の区分が異なるものがあったので、原資料を加工して図化した(例えばその他管理には、米・い草・茶の防除、くわの結束・解束などが合算されている。また、たばこ・くわでは施肥は整地・中耕除草に含まれている)。

生産物別全作業体系では、米・夏だいこん・たばこ・茶・くわ及び繭では女子労働時間の比率が47年には50%をこえ、いわば女性型作目ともいふべき特性を示している。かんらん・い草・りんご・み

かんではこの比率は40～50%の間にある。一方露地きうり、牛乳では、この比率が30%に達せずいわば男性型に属する。しかし、35～47年の間における女子労働依存率の変化率をみると、男性型の露地きうりにおいてさえ、秋かんらんと共に、依存率の上昇が著しい。夏だいこん・くわも、両年次間の女子依存率の変化率が+10%をこえ、女性化が一層進んでいる。しかし同じく女性型の米・たばこは、男性型の牛乳と共に、女子労働依存率は両年次間で微増にとどまっている。一方、りんご・茶は多分作業の機械化によって、両年次間で女子労働依存率が10%前後低下している。

さらに、作業工程別の47年度における女子労働時間の比率、35～47年の間におけるこの比率の変化率及び作業工程の特性(作業負担の質と量、技能の要求度、機械化の程度と作業人員、生育収量への影響度など)によって、各工程を第4表のように類型分けしてみた。A型は従来から女子労働依存度が高く、今後もその傾向が続くとみられる作業であり、C型は従来高かった女子依存度が近年低下している作業である。B型は、従前の男子依存から次第に女子依存を強めつつある作業である。一方、D型は従来も近い将来も女子依存度の低い作業である。このように、農作業内部における女子の分担は、男子労働力の流出に伴って、労働時間に占める量的比率が高まっているばかりでなく、質的には女子特有の単純作業に対する耐性、手先の器用さ、社会的地位に基く補助的¹⁾性格などに依存する部門への傾斜を強めつつあるとみられる。すなわち、技術を比較的要しない部門でまず女性化が進んでおり、作物・家畜の生育の根本にかかわるようなD1型や、1人で機械を操るD2型の作業は相変わらず主として男子の手に残されている。しかし、深刻な男子労働力の不足によって、女子労働が技能的な部門(B2)や機械の操作(B3)へも進出していることも見のがすことはできない。ちなみに、全国の農業機械研修施設で高性能機械操作を修得した公認オペレータ中の女子の比率は、内原研修館の資料によれば、45年現在、三重、山口、愛媛など西日本数県の0%を含めて平均3.4%(実数1,089名)、最高18.8%(徳島県)である。

第2表 性別・地位別農林業就業者割合

区別	年次(昭和 年)			
	36 %	41 %	46 %	47 %
男	自営業主	61	64	73
	家族従事者	30	28	16
	雇用者	9	8	11
女	自営業主	13	15	19
	家族従事者	82	83	78
	雇用者	5	2	3

注) 1) 総理府「労働力調査」によって作成。

第3表 農家の基幹作目別・家族の自家農業労働時間中女子労働時間の比率(%)

作目	年次(昭和 年)		
	35 %	45 %	47 %
稲作	49	53	53
雑穀・豆・いも類		56	54
野菜作	43	49	49
果樹作	46	48	49
工芸作	54	53	52
養蚕	49	54	55
養豚	47	53	56
酪農	43	46	44

注 1) 各年次の農林省「農家経済調査」による

第1図 米・野菜等の工程別所要労働時間中女子労働時間の比率

第2図 果樹・茶・くわの工程別所要労働時間中女子労働時間の比率

第3図 酪農の工程別所要労働時間中女子労働時間の比率

第4図 養蚕の工程別所要労働時間中女子労働時間の比率

第4表 女子労働への量的依存度からみた作業工程の類型試案

類型	作業の特性	最近の女子労働依存率 %	近年の依存率の変化	作業工程の例
A	1 単純なくり返し手作業	≥50	不変～上昇	除草、稲刈り、大部分の収穫、選別
	2 器用さを要するくり返し手作業	≥50	不変～上昇	野菜播種、田植、りんご交配、摘果
	3 やや体力を要する雑作業	40～50	上昇	野菜定植、みかん交配、苗代、かんらん育苗
		≥50	不変	野菜収穫跡片付け
B	1 体力を要する準備又は跡始末的作業	40～50	不変	くわ結束、解束
		≥50	不変	一部の整地、牛乳搬出
	2 生育、収量に係る技能的作業	<30	上昇	かん排水管理、乳牛管理、搾乳、りんごせん定
	3 機械化された粗大作業	<30	上昇	大部分の整地
C	1 機械化が進みつつある作業	≥40	下向	りんご防除、茶収穫
	2 技術の変化が著しい作業	≥50	下向	養蚕の各作業
D	1 生育、収量に係る技能的作業	<30	下向	りんご、茶の施肥、乳牛の飼料調製給与
	2 ほとんど1人で行なう機械作業	<30	不変	稲管理
		<30	不変	野菜出荷

4. むすび

昭和30年代以降における農村及び農業の変貌は過去に類のないほど急激であった。その特徴は、経営的には兼業化の深化であり、作業技術的には機械化の進行であり、同時に地域的には生産の組織化であった。このような変化が農家の婦人労働に及ぼした影響を明らかにし、婦人の特性を保護する立場からの問題点をさぐるということがこの研究の目的であるが、本報ではその手始めに、公式統計上に現

われた婦人労働の量的・質的变化を概括した。このような底流的な概況が具体的な村落のなかでどのように現われているかについては、続いて後報したい。

5. 引用文献

- 1) 酒井 学、倉田和彦、梅田栄男（1975）
：農家の婦人労働に関する研究。第2報、農作研。投稿中